

「日本語学習者」から「日本文学の読者」へ：自律型読解学習支援サイトのあり方とその可能性について

著者	森川 結花
雑誌名	甲南大学総合研究所叢書
巻	111
ページ	23-51
発行年	2012-03-01
URL	http://doi.org/10.14990/00003049

「日本語学習者」から「日本文学の読者」へ

——自律型読解学習支援サイトのあり方とその可能性について——

森 川 結 花

【要旨】

tutor.bunko 上級編「日本語上級者のための日本文学珠玉の小品集」サイトは、日本語学習者が日本の文学作品をインターネット上で気楽に読めるように文学作品の本文にツールチップ語注表示機能や朗読音声ファイル、挿し絵などの支援を施したHTMLを作成して公開している。この支援機能の有効性を確認し、学習者が自立的に読みを深めていくことができるかを10名の学習者モニターの協力を得て観察調査を行った。その結果、支援機能の有効性と、学習者の既知知識と読解スキルを駆使して作品を好意的に解釈していこうとする姿勢が確認された。しかし、学習者の注意がストーリーラインを追うことに偏る傾向があることも判明した。学習者が本物の日本文学の読者となるためには背景に撒かれた文化的な要素にも気づくことが必要となる。学習者の気づきを促し学習者を読者への成長させるためにはどんな支援が必要か。教材作成・サイト運営者にはそれが今後の課題となる。

キーワード：日本文学、読解教材、自律学習支援サイト、学習者、読者

1. はじめに

『日本語読解学習支援サイト tutor.bunko⁽¹⁾』（略称tutor.bunko, 2009年9月より公開）のコンテンツの一つ『日本語上級者のための日本文学珠玉の小品集』（以下、「小品集」と略称する）は日本語中級後半以降のレベル（N2～N1）の学習者をターゲットとし、ITによる支援を利用しつつ日本文学の名作（短編小説や随筆）を読み通す機会を与えることを目的として開発中のものである。

(1) URL: <http://basil.is.konan-u.ac.jp/tutor/bunko/>

日本語学習は上級レベルへと進むにつれ、「読むこと」の比重が高くなる。オーソドックスな教科書学習はもちろんのこと、討論・発表形式の学習活動やニュースの聴解なども新聞記事や論説文から情報を得ることと連動していることが多い。ところが、それらの話題が必ずしも学習者の興味関心とは一致するものではないこと⁽²⁾、加えて非漢字文化圏学習者にとって漢字語彙の負担が過重であることから、日本語学習への動機付けがくじかれてしまい、せっかく日本語学習をある程度の期間続けたにもかかわらず自力で「本物」の文芸作品などのテキストを読んだことがないまま日本語から離れていくというケースも少なくない。従って、上級レベルの学習者向けの魅力的な教材の開発が今の日本語教育全体の課題の一つであると言えるのである。

「小品集」はこのような現状を念頭に置き、「授業」という枠組みを越えたところでの上級学習者の自律的な読解学習、ひいては日本語での読書という営みを支援することを目指している。そして、そのテキストとして文学作品を選んでいくことを当サイトの特色としている。

以下、本稿では、文学作品を日本語学習のテキストとすることの意義、また学習者個人がそのテキストに向き合うことの意義を論じたい。さらに、実際にテキストを学習者モニターに読んでもらうことで得たフィードバックを分析し、今後のweb読解教材作成への展望を考察してみたいと思う。

(2) 瀬尾 (2011) による香港の上級社会人学習者を対象とした調査から。学習者は上級レベルで【文法の量】が減り、【興味と異なる内容】の読解教材に違和感を持つという。以下、学習者の証言を引用する (p.31より)「1年生と2年生のとき、文法がたくさんあって、たくさんのことを勉強しました。でも、今(上級時)は、文法もないし、教科書もつまらないし、ちょっと楽しくないです。/(上級時)何を勉強しているか、わかりません。まだ(日本語を学習する)興味があります。でも、何を勉強しているかわかりません。/6年生の教科書は本当につまらない。内容はつまらないよ。経済も、少子化もどれも興味が無い。/日本について悪いことばかり書いてある。勉強して、おもしろくないです。」

2. 先行研究

2. 1 言語教育の歴史的な流れの中での文学教材

言語教育、すなわち国語（第一言語／母国語）教育においても外国語教育においても、ある時期を境に文学偏重主義から実践・実用・コミュニケーション重視主義へと大きく流れが変わったのは周知の通りであろう。高橋（2009）によると日本国内での英語教育では1990年代からの過去20年にわたって中学・高校・大学の英語教科書に採択される文学作品が大幅に減少し、また、海外においても米国のESLでは1950年代から1980年代にかけて⁽³⁾文学作品を英語学習の教材から排除する動きがあったことが報告されている。李（2009）も中国国内における語文（第一言語としての中国語）の教育が1950年代から1990年代半ばにかけて文学を軽視してきたことを報告している。国（言語）によって時期や事情はさまざまであるが、言語教育の中で文学教材がある一定の期間敬遠されていたということは全く珍しくない。

言語学習のトレンドという要因の他に、カルトン・水野（2011）は外国語としてのフランス語教育（FLE）の立場から、語学教育がそもそも「作品を全体として研究することを意味するものではない」性質のものであることに加え、「時間的な理由」という現実的な制約もつきまとうことが語学教育の中で文学作品を扱いにくいものにしてしていると指摘している⁽⁴⁾。

日本語教育でも文学作品が主要な教材として扱われているとは言えない現状がある。中級後半～上級（N2～N1）レベルの総合教科書⁽⁵⁾を概観すると、【表

-
- (3) その後米国では一時期主流となったコミュニカティブ言語教育の限界が認識され、1980年代からオーセンティックな教材として文学作品が見直されるようになったという（高橋（2009））。
 - (4) 「したがって、原文を読む際、教師は作品の一文——多くの場合、代表的な場面や重要な箇所——を選んで取り上げ、それをより詳細に解説することになる。」(pp. 67 - 68) というその実情は、日本語教育でも同様のことが言える。
 - (5) 調査した教科書は【表1】にあげたものの他、『中級から上級への日本語』『上級で学ぶ日本語』『ニューアプローチ中上級日本語 [完成編]』で合計9種類の教科書について調査した。

1】の通り文学的な色合いの強い教材が課の本文として採択されること自体が少なく、採択されたとしても全課の一割程度といったところであるのが普通である⁽⁶⁾。従って、「文学作品を読む」ことをテーマとした日本語の選択科目を受講しないかぎり授業の課題として一編の文学作品を通読するチャンスはほぼ巡ってこないと言えるだろう。

【表1】 文学教材を採択している日本語教科書

教科書名	本文数	文学作品あるいは文学色の強い課
上級日本語 ⁽⁷⁾	11	(7) 俵万智「俵万智と読む恋の歌百首」
日本語中級J501	10	(9) リービ英雄「奈良枝からの手紙」(随筆)
日本への招待	6	(4-2) 阿刀田高「銀色の登り道」(短編小説)
文化へのまなざし	18	(3-2B) エリス俊子「菜の花へのまなざし」他2編の翻訳論
日本語3rdステップ	12	(3) 芥川龍之介「蜘蛛の糸」(短編小説) (4) 増田れい子「ローズマリーの旅」(随筆) (5) 星新一「アリとキリギリス」(短編小説) (12) 大岡信「ことばの力」(修辞論)
「大学生」になるための日本語	18	(3) 西本鶏介「親孝行な男の子」(昔話) (12) (13) 山田詠美「僕は勉強ができない」(小説)

しかし、このような流れの一方で、ハドソン(2008)、當作(2010)、柴田(2010)、森岡(2010)、横田(2010)などの報告にもあるように、米国の高等教育機関では近年、National Standardsの実現を可能にするものとして文学作品を主教材とした授業が実践されるようになってきている。

以上のように、言語教育における文学教材は、時代の流れに左右され、もてはやされたり敬遠されたりしながら現在に至っているのである。

(6) これら教科書の中では『日本語3rdステップ』の文学的な教材の採択率の高さが目を引く。甲南大学の上級レベルではこの教科書を使用しており、N2～N1レベルの教科書としては珍しく学習者からの好評を得ている。

(7) 『上級日本語』は第一部と第二部に分かれ、第二部は文学編として和歌、俳句、詩、短編小説、随筆が掲載されている。ただし、語彙リストなどはない。

2. 2 文学作品を授業教材に用いることのメリットとデメリット

次に、文学作品を主教材とした教室内学習活動の実践を報告する先行研究から、そのメリットとデメリットについて確認しておきたい。

Custodio&Sutton（1998）は中等教育におけるESLの授業において歴史小説作品を教材としたContent Based Instruction（CBI）の授業を実践し、それによって以下の5項目23種類の効果が得られたことを報告している。（【表2】）

**【表2】 Advantages of Historical Fiction in ESL Classrooms
Custodio&Sutton（1998）⁽⁸⁾**

Is literature-based	<ul style="list-style-type: none"> ・ Helps Children “experience” past ・ Develops higher level skills ・ Introduce quality literature ・ Builds self-esteem ・ Integrates language skills
Builds background knowledge	<ul style="list-style-type: none"> ・ Develops cultural knowledge ・ Builds scaffolds and schema ・ Develops historical knowledge
Uses a content-based instruction syllabus	<ul style="list-style-type: none"> ・ Meaningful communication ・ Low affective filter ・ Message vs. form ・ Comprehensible input
Offers a bridge to mainstream academic classes	<ul style="list-style-type: none"> ・ English language Arts ・ History ・ Geography
Is interdisciplinary	<ul style="list-style-type: none"> ・ Geography ・ Science ・ Music ・ Drama ・ Language Arts ・ Math ・ Art ・ History

【表2】に見られるように、文学作品を使用したCBIの教育実践ではアカデミックな内容の言語表現活動の練習が自然にできるとともに言語面のスキルアップ、教室活動のバリエーションの拡張、背景知識の獲得、そしてセルフ・エ

(8) p.31の図より作成

スティーム（自尊心）が得られ、それらが関連科目への橋渡しにまでつながるというように教育効果は大きく幅広い。

ハドソン（2008）も大学における日本語短編講読講座における実践から、言語5技能の融合が自然に実現でき、【表3】のようにNational Standardsの提唱する5C（Communications, Cultures, Connections, Comparisons, Communities）の実践も容易であると述べている。

【表3】 5C実践の方法⁽⁹⁾

1. コミュニケーション：英語以外の言語で伝達
1.1 相互形体：受講者間の質疑応答、話の結末予測、意見交換・感想等の話し合い
1.2 解釈形体：短編の読み、ビデオの視聴
1.3 発表形体：意見・感想の個人発表、自作短編のグループ発表
2. 文化：他文化についての知識の取得・理解
2.1 目標文化の慣行（短編の内容、構造など）と発想（人生観、教訓など）の関係を理解
2.2 文化的産物（短編そのもの）と発想の関係を理解
3. 連結：他の分野と連結・情報取得
3.1 ごく初歩的・表面的ではあるが、日本語の「短編」に関する情報取得
3.2 日本語で短編を読むことによるのみ知り得る特有の視点について情報取得
4. 比較：言語・文化の本質に関する洞察力開発
4.1 短編に使われる日本語と母語とを比較
4.2 短編に現れる日本文化と自分の文化とを比較
5. コミュニティ：身近および世界の多言語コミュニティに参加
5.1 教室内外で日本語での楽しみ、意見交換
5.2 楽しみ・教養のための読書を続けることにより生涯学習者への一歩

森川（2009）⁽¹⁰⁾の実践においてもCustodio&Sutton（1998）、ハドソン（2008）の報告するのと同様の教育的効果⁽¹¹⁾が認められ、文学作品を主教材とするCBIの授業実践の有効性を確認することができた。しかし、同時に実際の授業実践では【表4】にあげるような問題点も生じることが確認された。

(9) ハドソン（2008）p.114表14による

【表4】 文学作品を主教材にしたCBI志向の授業に伴う問題点（森川2009）

- | |
|---|
| 1. 従来のオーソドックスな教科書学習との比較において |
| <ul style="list-style-type: none"> ・学習者自身がCBIに不慣れで不安を覚えやすい ・CBIでは成績が点数化されにくく、学習効果が学習者に見えにくい |
| 2. 学習者が内包する問題に関して |
| <ul style="list-style-type: none"> ・基礎学力、一般教養、思考のトレーニング経験の不足が響く ・学習者個人のプライベートな問題が表面化してしまう |
| 3. 作品の好みに関して |
| <ul style="list-style-type: none"> ・万人受けする作品が見つかりにくい ・学習途中で学習者の好みが変わることがある |

唐（2011）も中国人学習者を対象とした授業実践において、学習効果の見えにくさから学習者が不安・不満を持つことがあるという事実を報告している。つまり、漢字文化圏／非漢字文化圏を問わず学習者は共通の問題点を抱える傾向があると言えよう。

このように、文学作品を主教材にした授業では従来の教科書学習では得がたい教育上の効果と満足感があるのと同時に「諸刃の剣」的な面も持ち合わせていて、学習者の不安・不満を招く恐れもあるというリスクがつきまとう。このリスクをどのようにコントロールするか、現場の教師は場合によってはそれへ

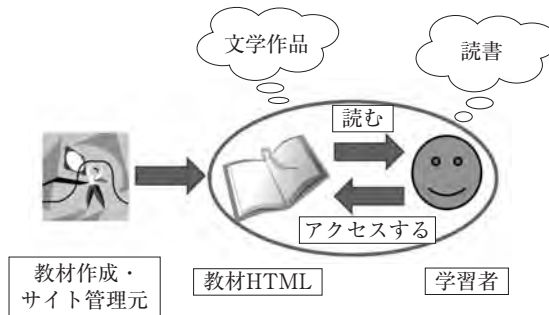
-
- (10) 2008-2009年のYIKプログラムEクラスでの授業実践。学習者の国籍はフランス1、韓国1、アメリカ7の9名。学習者の日本語レベルはN1程度が3名、N2程度が6名であった。吉本ばななの短編小説「ムーンライトシャドウ」を主教材として3週間、授業時数12時間をかけて学習した。学習者には本文（参考資料として英訳も添付）を各自の予習で読ませ、教室では内容についての設問に従って討論活動。最後に日本人ゲストを招いての読書会。まとめとしてのレポート提出と口頭試問を課した。
- (11) 具体的には、クラス内討論やレポート作成のために何度も繰り返してテキストを読むことになること／クラス内討論において自然に知的な会話が楽しめること／教師が学習者の発言内容を心から褒めてあげることができること／ホストファミリーなど周囲の日本人に好意的に受け入れられること／一つの作品を読了することで自信が得られること／などが教育的効果として認められた。

の対応を迫られることもあるだろう⁽¹²⁾。

3. 「文学を読むこと」とオンライン自律学習

前節でも述べたように、教室授業で文学作品を主教材とすることには常に学習者の不安・不満が伴いがちであるが、この問題点の一つの解決策として期待されるのがオンライン自律学習という学習環境・形態である。その理由は次頁【図1】で示すようにオンライン自律学習が個人の読書に非常に似た状況下で行われることによる。

【図1】 オンライン自律学習と個人の読書



【図1】の楕円形で囲んだ閉じた空間の中でユーザー-学習者は教材HTMLに能動的にアクセスしテキストを読む。この楕円形範囲内での学習者の活動に関しては基本的に他者の介入は有り得ない。ここは極めて個人的な空間なのである。サイト管理元にいる教材作成者も一旦教材HTMLを作成して送り出し

(12) 文学作品を読む授業が選択科目の場合は、学習者にも授業選択の自由が許されており、シラバス提示や授業オリエンテーションによって学習者に授業の意図を納得させた上で受講させるという形で、事前に学習者からの不満を抑制することができるだろう。また、ハドソン（2008）が実践しているように、短編小説を読むことを主たる学習活動にすると同時に、日本語能力試験対策（模擬試験）を授業外の学習活動として希望者に提供するというオプションの提供も、「読む」授業だけでは物足りなさを感じる学習者への対応策の一つとして参考になる。

た後はユーザー学習者の「読む」という活動に操作的に介入することはもはやできないのである。そして、この図式を教材HTML＝文学作品、ユーザー学習者＝読者と読み替えれば、これは個人の楽しみのための読書の状況に近似するものと考えることができる。

また、「自律学習」の「自律」には「学習者の自由」の意味が含まれているということを確認しておきたい。「自由」とは西田谷（2000）⁽¹³⁾が述べた「読者の自由」という概念から本稿が着想したものであるが、学習者には「三つの自由」、すなわち、（1）選ぶ自由（2）やめる自由（3）考える自由が保証されており、この「自由」が、個人的な読書において、また、自律型読解学習において得られる「楽しさ」を支えているという考えである。

ただし、後節で詳述するが、「小品集」では学習者にありがちな誤読を回避するための工夫をHTMLに組み込んでおり、学習者の解釈が本来のストーリーラインから甚だしく逸れることはないように最低限の誘導⁽¹⁴⁾はしているので、完全に読書と同じ状況を再現していると言えるわけではない。しかし、特定の読解スキル（たとえばトップダウン読み、スキミング、スキミングなど）の

(13) 西田谷（2000）は「読者」と「作品」との関係において以下のように述べている。
（下線は本稿による）

言葉で書かれた芸術テキストを、「作品」ととらえる考え方には、個性と独創性をもつ作者が、個人の性向や心理に基づいて書き、しかも完成したテキストをその後も個人に所有する権利をもつという、近代資本主義社会に基づく、個人による私的所有という観念が存在しています。このような「作品」を読む場合、読者の自由は、その「作品」を拒否する自由、読まない自由だけです。読者は受動的に最終的に作者が設定した唯一の意味を探しあてるだけの受動的な客体になっています。

(14) このほか、「ごんぎつね」「南京の基督」「一房のぶどう」「ゼロ弾きのゴージュ」に関しては、正しくストーリーを読み取れているかの確認をするための「選ぶ問題」（選択式内容確認問題）も作成し公開している。これによって「正しい読解」に導けることはモニター調査で確認済みであるが、「正しい読解」への誘導の是非とその方法についてはまだ結論に至っておらず、学習者にとって最良の方法を模索中である。

使用を指示することなどはせず、感想等の自己開示もユーザー学習者の自由に任せる形をとって、学習者が何かを強制されていると感じないように配慮している。

甲田（2009）によると日本語は文章そのものが本来的に読者に依存する性質が強い⁽¹⁵⁾ということである。ならば、読み方や解釈等に関する基本姿勢が「読者に任されている」という「小品集」の状況設定は、学習者が日本語のテキストに向き合う形として好ましいものと言えるのではないだろうか。

まとめると、自由な「本物の読書」に近い状況のもとで学習者の本来の個性と能力、そして作品を読むことで起こる内面の変化を尊重することが現在の「小品集」における支援の基本姿勢なのである。

4. 「小品集」の作品たち

4. 1 文学作品の教材価値

「小品集」は教材本文を青空文庫に公開されている著作権の存在しない文学作品から採択している。現在「小品集」で公開している作品は【表5】にあげた12作品⁽¹⁶⁾である。その本文には、日本語教育の観点から学習者にとって有益とは考えられない難解語等は差し替えるなど若干の修正を加え、e-chutaツールチップ訳語表示機能または読解アシスタント辞書表示システム⁽¹⁷⁾を用いて教材HTMLを作成し公開している。

(15) 甲田（2009） pp.177-178

(16) これら12作品の他に、2011年8月より、「小品集」ココログサイトに「稲むらの火」を新規公開している。

(17) 「読解アシスタント」URL: <http://dokkai.mit.edu/index.cgi> はマサチューセッツ工科大学の長谷好美・メドロックまり子が開発し公開中の読解教材作成支援システム&教材リソースサイトである。教材コレクションとして文学作品、新聞記事をテキストとした読解教材が公開されている。

【表5】 「小品集」に公開中の作品一覧（Web上の公開順）

作品名	原作者	ツールチップ表示	挿し絵	朗読
ごんぎつね	新美南吉	e-chuta	築地葵	北川京子
南京の基督	芥川龍之介	e-chuta	築地葵	市村徹
一房の葡萄	有島武郎	e-chuta	築地葵	市村徹
ゼロ弾きのゴーシュ	宮沢賢治	読解アシスタント ⁽¹⁸⁾	築地葵	北川京子
桜桃	太宰治	e-chuta	築地葵	長野一字
夏目漱石先生の追想	寺田寅彦	読解アシスタント	築地葵	市村徹
蜘蛛の糸	芥川龍之介	読解アシスタント	井上直	市村徹
姨捨山	楠山正雄	読解アシスタント	築地葵	大森裕子
姨捨	堀辰雄	読解アシスタント	(なし)	大森裕子
雪女	小泉八雲／ 田部隆次訳	読解アシスタント ⁽¹⁹⁾	井上直	大森裕子
耳無芳一の話	小泉八雲／ 戸川明三訳	(準備中)	井上直	市村徹
桜の樹の下には	梶井基次郎	(準備中)	(なし)	市村徹

これらの作品は、現代文学というよりはすでに「古典」の域に入った感のあるものもあるが、日本語上級者向けの読解教材テキストとして以下に列挙する価値が認められることから「小品集」に採択している。

- ・ 作品世界の内容および日本語のテキストとしての質が高い
- ・ 日本語の原文を読むことでしか得られない情報がある
- ・ すでに名作の評価を得て文化的な価値が安定しているので、「定番」教材となりうる可能性を持っている
- ・ 映像化作品や翻訳などがあり、それらを活用しやすい

(18) 「読解アシスタント」サイト内教材コレクションにリンクする形で借用させていた
だいている。http://dokkai.mit.edu/texts/934256617984.html

(19) 読解アシスタントへのリンク

http://dokkai.mit.edu/texts/887073565580.html

http://dokkai.mit.edu/texts/435015846599.html

http://dokkai.mit.edu/texts/390219424423.html

- ・海外における日本文学研究の対象として原作者あるいは作品がしばしばとり上げられるので、学習者が予備知識を持っていることが期待できる

4. 2 文学作品の教材HTMLに施された読解支援機能

「小品集」の作品テキストは【図2】のように本文にはツールチップ語注表示機能（以下「ツールチップ表示」と呼ぶ）をHTMLに組み込み、挿絵と朗読音声をつけている。

【図2】「ごんぎつね」本文（第5節の冒頭）⁽²⁰⁾



ツールチップ表示は学習者の辞書引きの負担を軽減するだけでなく、漢字が読めない不安や意味を覚えられない不安を取り除く働きをする。「分からなければクリックすればいいのだ」という安心感に支えられてテキストをどんどん読み進めていくことができるので、漢字仮名交じり文に対する不安の高い学習者には効果的である。また、「漢字を読むことは苦手だが読み上げてもらえば分かる」という学習者には朗読音声ツールチップ表示と並んで有効である。

文脈の読み取りに関しては、ツールチップ表示で会話文の話し手を表示し学習者が「誰が何を言っているのか」という点を見失わないように支援している。

(20) 【図2】はココログサイトに移行作業中の「小品集」より

<http://ttb-bungaku.cocolog-nifty.com/blog/2011/07/post-3c88.html>

さらに実質的な効果が期待できる支援は挿絵である。物語世界の舞台となる日本の情景やその中にある事物、登場人物たちの立ち位置や動きを絵で確認できることは、日本の自然や社会の習慣などに関して既有知識を持たない学習者にとってストーリー把握のため有効なナビゲーションとなる⁽²¹⁾。

5. 学習者モニターによる「読書」行動観察調査

本章では「小品集」の二作品に関するモニター調査の結果を報告する。学習者が「小品集」の作品を読む際にサイトが提供する支援をどのように用いるか。実際のところその支援は有効か。また、特に読み方についての指導をせず読む人の能力と個性にゆだねる（つまり、作品を自由に好きなように読んでもらう）方法で、読む人（学習者）はそれぞれの内面にどんな作品世界を獲得するか。誤読することはないのか。それらの点を確認するために、10名の学習者モニターの協力を得て「読書」行動観察調査を行った。以下、その方法と調査結果について報告し結果の分析と考察を試みる。

5. 1 調査対象とした作品について

まず、モニターによる「読書」行動観察調査の対象作品として選んだ二つの作品「ごんぎつね」⁽²²⁾と「南京の基督」⁽²³⁾について見ておきたい。

「ごんぎつね」は大正～昭和初期の児童文芸誌「赤い鳥」に掲載された新美南吉作の名作童話であり、小学校国語教科書の定番教材となって半世紀以上にもなるものである。従って「日本人なら誰でも知っている」と言えるほどの一般性があり、個々人によって多少の差はあれ、現代日本人の精神形成過程において一つの「通過点」になっていると言えるものであろう。それゆえ、日本語学習者が自分が属するコミュニティ内の日本人との共通の話題にしうるもので

(21) 文章の理解を助ける図の効果については、甲田（2009）第2部第3章に詳しい。

(22) http://basil.is.konan-u.ac.jp/tutor/bunko/gon/gongitsune_text.html

(23) http://basil.is.konan-u.ac.jp/tutor/bunko/kirisuto/nankin_text.html

あることも確かである⁽²⁴⁾。

一方、「南京の基督」は、芥川龍之介作品中の切支丹物の一編であり映画化⁽²⁵⁾もされた作品である。新美南吉の「ごんぎつね」が小学校国語教育の定番であるのと似て、日本語教育では芥川龍之介の「蜘蛛の糸」が読解教材として好まれる現状が認められる。ただ、惜しむらくは「蜘蛛の糸」も「ごんぎつね」と同じく『赤い鳥』に掲載された児童文学作品で、もとは子供向け作品であったという事実の存在である。成人の日本語学習者には“子供扱い”を非常に嫌うタイプも珍しくないことから教材作成者としては大人向けの文学作品の教材化が課題となる。そういった理由から、同じ芥川作品の中から敢えてテーマおよびモチーフが完全に大人向けであり、文体も時代性を帯びた格調高い作品である「南京の基督」を観察調査の対象作品とした。

また、「ごんぎつね」「南京の基督」の二作品は共通して「宗教」という哲学的な問題について考える素材となりうる。さらに、どちらも表面的には所謂「因果応報譚」の様相を見せながら作品の底流に真のテーマが秘められていて、それが作者から読者への“挑戦”となっている⁽²⁶⁾。これらの点で成人学習者が読んで鑑賞するのに十分ふさわしい文学的に深みのある内容を持つものであると

(24) 実際に後述する学習者モニターQ、B、Mがホストマザーや日本人の友人と「ごんぎつね」について語り合ったことを報告している。

<http://gongitsune6girls.blogspot.com/p/s.html>

(25) 「The Christ of Nanjing 南京の基督」1995年トニー・オウ監督日本・香港合同作品

(26) 作者から読者への“挑戦”に関して言えば、三作品の中では「南京の基督」が最も“挑戦”的要素が強いと思われる。物語の舞台となっている中国・南京、主人公は15歳の少女娼婦でローマ・カトリック教徒。登場人物に日米混血の男性…と、作品成立当時（1920）の日本人読者にとって現実感のないエキゾシズムに彩られた背徳的ストーリー展開から、作者・芥川の本意を見抜くことは容易ではない。この作品のテーマが「日本人の旅行家」という登場人物に仮託された芥川自身の苦悩（深刻な社会問題を前に、知識人でありながら現実には無力な存在でしかない自己の認識）であることは、作品の結末の「種明かし」を読者がうまく捉えることができるかどうかにか委ねられている。

認定して、今回の調査の対象に「ごんぎつね」と「南京の基督」の二作品を選んだのである。

5. 2 「読書」行動観察調査の方法

- 実施期間 2011年2月～3月⁽²⁷⁾
- 対象作品 「ごんぎつね」／「南京の基督」
- 指定／配布したもの
 - ・「小品集」サイトの作品本文HTML
 - ・作品本文をプリントアウトした小冊子
 - ・構文ナビ⁽²⁸⁾（「ごんぎつね」のみ）
 - ・英訳⁽²⁹⁾（「ごんぎつね」のみ）
- 学習者モニターの内訳

「ごんぎつね」グループ：2010～2011年度甲南大学短期交換プログラム
参加中の留学生 6名

「南京の基督」グループ：甲南プログラム修了生 4名

【表6】 学習者モニターのプロフィール⁽³⁰⁾

	モニター	母語	JLPTレベル	学習歴		モニター	母語	JLPTレベル	学習歴
ごんぎつね	J	韓	N1	2年6月	南京の基督	S	英	1級	5年
	A	中	N2	1年6月		K	中	N1	4年6月
	Q	英	N2	2年6月		P	英	N2	5年
	R	英	N3	2年6月		H	英	2級	5年
	B	英	N3	2年6月					
	M	仏／西	N4	8ヶ月					

(27) モニター協力者の一部は東日本大震災の影響によりこの期間内に調査ができず、後日、調査結果の回収となった。

(28) http://basil.is.konan-u.ac.jp/tutor/bunko/gon/gon_navi2.pdf

(29) ごんぎつね英訳は“A fox called GON”（新美南吉童話集よりシリーズ3「ごん狐」蜂須賀幸路訳（2006）夢サポート助成作品）を使用した。

(30) JLPTレベルはモニターS、Hを除き推定レベル。Sは2006年に1級合格、Hは2009年に2級合格。なお、P、Hは2011年7月に実施されたJLPT・N1レベルに不合格だった。

- 「読書」行動観察の手順

1. 「小品集」サイトあるいは作品小冊子いずれか好きな方で作品を読む
2. 読んでいて理解不能な箇所／自分が気に入った箇所／作品のキーワードだと思った語などを小冊子に記録する
3. 感想書き込み用ブログ⁽³¹⁾にコメントを投稿する

本調査のモニター協力者10名は、もともと読書好きで調査の呼びかけに対して高いモチベーションを持って応じてくれた／留学プログラム中の日本語の授業でも成績上位者で知的レベルも高い／「ごんぎつね」グループのQ、R、B、Mは将来文筆業または文化系の大学院進学を希望しており、これまでも文学に関する講義等で専門的な勉強の経験がある／「南京の基督」グループのうちSは結婚、K、Pは就職で生活者として日本に居住し、日常的に新聞、雑誌、書籍等に触れている。Hも3度目の日本留学中である／というような背景をもっており、日本語学習者として恵まれた素質と環境を持っていると言える学習者たちである。

感想書き込み用ブログには次のような質問項目を設け、自由にその項目を選んで答えるという形で感想を引き出すようにした。質問の内容はCBIを意識してモニター学習者が考察を深めるきっかけとなる要素を盛り込んだ。主な質問項目は以下の通りである。

<ごんぎつね>

- 児童文学についてどんなイメージを持っていますか。
- 日本の宗教観はあなたの国の宗教観とどんな違いがありますか。
- 日本らしさを感じる場所はどこですか。

(31) 「ごんぎつね」グループのコメント書き込み用ブログのURL : <http://gongitsune6girls.blogspot.com/>

「南京の基督」グループのコメント書き込み用ブログのURL : <http://jp-literture.blogspot.com>

- ごとんと兵十についてどう思いますか。兵十がごんを撃ったことを許せますか。

<南京の基督>

- あなたの国では文学作品の中に「娼婦」が出て来るとき、どんなイメージで描かれますか。
- この作品の読んで、どんな後味が残りましたか。
- この作品は恋愛小説だと思いますか。サスペンスでしょうか。どんなジャンルに属するものだと思いますか。
- この作品はキリスト教に対する冒涇だと感じますか。日本人にはキリスト教は分からないのでしょうか。

5. 3 「読書」行動観察の結果

5. 3. 1 ツールチップ語注表示機能の有効性

まずは「小品集」サイトのIT技術の支援であるツールチップ表示の有効性について調査した結果を次頁【表7】にあげる。

【表7】 ツールチップ表示は役に立ちましたか？（○：使用した／×使用せず）

	モニター	母語	語彙を調べながらの通読に要した時間	ツールチップ	感想
ごんぎつね	J	韓	1時間強	×	電子辞書で調べた。
	A	中	2時間半	×	ネット辞書で調べた。
	Q	英	2時間半	○	ツールチップ表示だけで十分だった。電車内でだけ電子辞書を使った。
	R	英	不明	×	チャレンジのためツールチップは使わなかった。訳さずざっと全体を通読するのに15分。
	B	英	1時間15分	○	電子辞書だと1頁30分。ツールチップだと1頁5分。
	M	仏西	10時間	×	英訳と比較対照し一語一語異同を調べた ⁽³²⁾ 。
	D	独	30分	○	※参考データ。JLPT 1級合格者。ツールチップ表示だけを使用し通読。
南京の基督	S	英	3時間	○	ツールチップが役に立って、普通に読んで楽しめた。これがないと苦勞していたと思う。
	K	中	1時間半	×	電子辞書をちょっとだけ見た。
	P	英	不明	○	ツールチップ+Rikaichan。ツールチップで意味が出て来ても、読むのを中断されるので読みにくい。調べるべき言葉が多すぎたことと会話文の話者が分からないこと、古語・外来語に苦しんだ。
	H	英	3日間	× ⁽³³⁾	青空文庫の本文+Rikaichan。とても苦勞して読んだ。読んでいる途中であらすじを見つけて読み、やっと全体像が理解できてから本文が理解できるようになった。

【表7】から明らかのように、英語母語話者Q、B、Sは積極的にツールチ

(32) 「自分はまだ日本語初心者なので語注が表示されても文全体の意味が分からないから」と本人自ら日英間の対比を調べる方法を提案し実行した。

(33) Hがツールチップ機能を使用しなかった理由は、「小品集」サイトの「南京の基督」本文にツールチップ機能があることを全く失念していたという不運から来たものである。そのため、自力で青空文庫の本文をRikaichanにかけ、非常に苦勞して通読した。

ップ表示を利用し、その便利さを高く評価している。Bは「最初は電子辞書で調べようと思ったが、それだと1ページ30分もかかるので途中で諦め、ツールチップ利用に切り替えた。ツールチップ表示を使うと1ページ5分だった」と具体的に所要時間が6分の1に削減されたことを証言している。参考データとしてドイツ語話者のDにもツールチップ使用に限定して本文を読んでもらったところ30分で通読している。このように、非漢字文化圏出身学習者にとって大きな「障害」となっている漢字と語彙調べの負担がツールチップ表示によって軽減され、漢字文化圏学習者との間にあったハンディキャップが補われることが分かった。ただし、その便利さは分かっている、Rのように「自分のチャレンジのために電子辞書を使うことを選択したい」という信念を貫く例もある。

一方、ツールチップ表示に加えて自分の使い慣れているRikaichanを組み合わせようとしたPは、そのことによって却って混乱に陥ったようである。日本の文学作品の文章は表記および使用語彙の特殊性が強く、一般的な辞書ソフトの使用は適さない。このことはPおよびH（Rikaichanだけで青空文庫の本文を読んだ）の証言から明らかであろう。逆に、文学作品にはe-chutaシステム等を用いた日本語教師の作成による語注ツールチップ語注表示機能付きテキストHTMLが強みを発揮するということが言えるのである。

5. 3. 2 作品内容についての感想

次に、ブログへのコメントや面談によって回収した作品の内容についての個々の感想について要点をまとめたものを【表8】 【表9】としてあげておく。

【表8】 「ごんぎつね」の感想（下線は本稿による）

学習者	コメント投稿数/面談	「ごんぎつね」の感想まとめ
J	面談	韓国にも似たタイプの話があるので懐かしい。いいことをするつもりだったところに人間の本性が現れていると思う。悲しい話には真実が語られ、人間は悲しい話から学ぶものだ。この話の結末には納得できないが、そう思う。

A	1	前に簡易版で読んだが、原作は背景や人物の叙述が詳しい。だいたい分かったが時間がかかった。ごんが哀れだと思った。
Q	8	ごんは自分の非を悟り改心した。そのごんを最後に殺すなんて共感するには残酷すぎる。でも、子供に世の中の真実を隠さず教える大切さについては児童文学の授業で学んだ。
R	7	とても気に入った。ごんも兵十も私みたいだと思う。世の中の明暗をこの話は教えてくれる。単純で「いい人」同士の誤解とすれ違い。最後に兵十がごんを撃ったのも理解できる。
B	4	他の国の児童文学にも残酷な話はある。そこから子供は真実を学ぶ。私には兵十の行いを責めることはできない。この種の誤解は世の中で容易く起こり誰もが後悔する。そのことを兵十もごんもお互いに理解し、許し合えたらう。
M	11	児童文学のコースを受講して子供の発達への影響力や挿し絵の効果などについて学んだ。ごんは野生動物でありながら、人間にすごく似たキャラクター。どちらの性格も子供の心の中には存在している。兵十の仕打ちはリベンジというより農民として当然だと理解する。その兵十をごんは許したのだから、わたしも兵十を許す。

【表9】 「南京の基督」感想

学習者	コメント投稿数／面談	「南京の基督」の感想まとめ
S	2 + チャット	普通に読んで楽しめた。変な話だと思った。主人公の子供っぽい頭の中で考えた話だと思っていたが、最後に現実に戻って、他の男から話の事実が出て来る。何が言いたいのかよく分からないが自業自得の教訓話ではないことには気が付いた。騙されていた感じがした。
K	4 + 面談	この話だけ読んでもテーマは分からなかったけれど、他のレビューサイトを見たりして考えた。世の中には知らない方がいいと言うこともある。そのことをジャーナリズムの授業で学んだ。死んでいく人に事実は伝えられない。幸せな気持ちのままそっと送ってあげるしかないこともある。
P	3 + レポート	自分にとってbig challengeだった。この手の話は学校では読まされたことがあるが、自分からは読まない。これはChristianityの話だとは思わない。ナイーブな娼婦のキャラクター設定は興味深い。しかし、僕自身は現代物の小説を読みたい。
H	14 + メール	楽しめなかった。言葉調べに過剰な負担を強いられた。同じ表現の繰り返しには辟易。主人公に宗教性は感じない。米国ではこんな風に宗教を扱ってはいけない。これはユーモアと皮肉の話だろう。「日本人の旅行家」だけがまともで好感もてる。

下線____で示したように、学習者の多くは過去に受講した専門授業の内容や自分の体験などの既有知識を駆使して作品世界を好意的に解釈しようとしている。Kはさらに参考となる情報を検索する行動にも移っている（下線~~~~）。作品に向き合う学習者はまず一つの言語表現上の意味確認の次は既有知識を使っての作品内容の解釈をし、その次には他の参照データを求める情報検索へと手順を踏みながら作品世界を解釈していくことが分かる。内容解釈のステップに関しては特に教材作成・サイト運営者からの支援がなかったにもかかわらず自分たちの知識と感性を動員して優れた洞察が行われていることは評価に値すると言えよう。「学生の個人的な読みの質を高めることのできる最適な方法は、作品全体を通して読むことであり、そこでこそ、分析の精神と同時に《密漁》の精神が発揮されるのである」（Dufays, Gemence, Ledur, 2005, p. 35）⁽³⁴⁾と述べられていることがこの調査の観察結果においても表れていると言えるのではないだろうか。

またもう一つ行動観察の上で目を引いたのは、モニター学習者同士が互いにコメントを交わすことを避けていたという点である。実際には友人同士の間柄である彼らでも個々の文学作品の解釈に関しては自然にお互いに不可侵であるべき領域であったと見え、ブログの他人のコメントにコメントをつけるという例は今回の行動観察調査においては一例もなかった。「読書はプライベートなもの」という空気が暗黙のうちに成立していたものと考えられる。

5. 3. 3 学習者の「読み癖」

以上見てきたように、ストーリーラインを誤読することなく自力で優れた作品解釈に行き着いた学習者たちであるが、テキストの紙媒体（小冊子）に書き込まれた読書記録から彼らにある種の「読み癖」があることが認められた。それは、「動き」のあるところに学習者の注意・関心が集まるという点である。

(34) カルトン・水野 (2011) p. 68より。なお、ここでいう「密漁《braconnage》」とは、「文学作品の正統的・権威主義的な読みをかいくぐって、作品の中に新たな意味の可能性を発見することである」と解説されている。

そのことは二人以上の学習者が作品のキーワード／キーポイントとしてマークした箇所を抜き出してみると明らかになる。

【表10】 キーワード／キーポイントとして二人以上の学習者にマークされた箇所

<p>ごんぎつね</p> <p>いたずら／穴／魚を捕る張り切り網／魚をつかむ／盗人狐／一生懸命に逃げる／葬式／白いかみしも／位牌をささげる／ウナギが食べたい／あんないたずらをしなければよかった／俺と同じ／独りぼっちの兵十／イワシを投げ込んで／うなぎのつぐない／兵十の家／イワシ屋にひどい目に遭わされた／栗を拾う／松茸を毎日くれる／知らんうちに／神様に御礼を言う／「俺が毎日松茸や栗を持って行ってやるのにその俺には御礼を言わないで神様に御礼を言うんじゃ俺は引き合わないなあ」／栗を持って／ふと顔をあげました／土間に栗が固めておいてありました／うなぎきました</p>
<p>南京の基督</p> <p>無邪気な希望の光が生き生きと蘇った／皮肉な調子が入り交じった／誰にも迷惑はかけておりません／さもなければ私は／私どもの幸せのために／恨みもない他人を不幸せに致すことになりますから／テーブルの上のランプの火は一頻りぱっと燃え上がって／娼婦には大金の十ドルも金花の決心は動かせなかった／初めて知った恋愛の歓喜が激しく彼女の胸元へ突き上げてくるのを知るばかりであった／基督の家に違いなかった／無限の愛を含んだ微笑／私は中国料理は嫌いだよ</p>

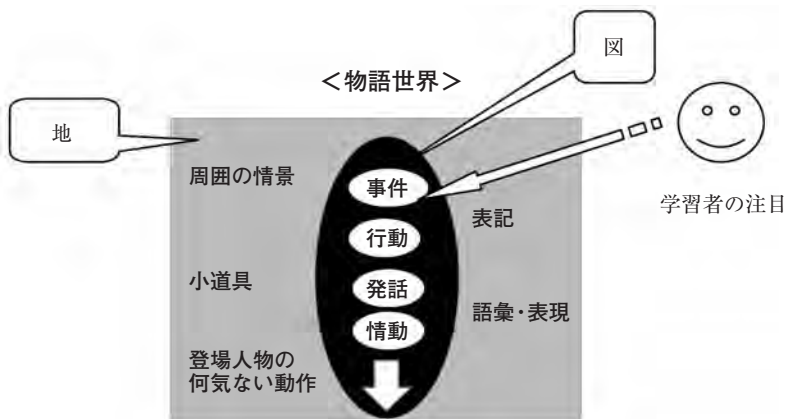
このように、登場人物の発話や行動、事態の変化や事件の展開など、何らかの「動き」に学習者の注目は集まりやすいという傾向があるのである⁽³⁵⁾。

「動き」はいわば作品テキストの中でハイライトされる部分であり、それをフォローしていけばストーリーラインは読み取れる。従って、物語の中の「動き」を追うことは読みの姿勢として間違っているわけではない。しかしながら、日本の文学作品にはストーリーラインの背景となるところに文化的なシンボルやコード性を持つ事物がさりげなく配置されていることがある⁽³⁶⁾。このストーリーラインと背景との関係を認知言語学的物語論⁽³⁷⁾の「図と地」の概念に当て

(35) ストーリーを読むのとは逆に、ストーリーを構築して語る際にも、英語、中国語、韓国語母語話者には起こった事実に焦点をあてて物語を展開していくという（事実志向）の傾向があることが山田（1985）、田代（1995）、渡邊（1996）などの先行研究で指摘されている。読むときも語るときもダイナミックに動くもの／ことに注意が向けられるのが学習者たち本来の傾向であると言える。

はめて【図3】のように表すことができるだろう。

【図3】学習者の「読み癖」



たとえば、「ごんぎつね」第2節の葬列の場面を見てみよう。

【図4】「ごんぎつね」(二) 葬列の情景



(36) 牧野 (2008) ではビデオ作品「千と千尋の神隠し」を主教材とした授業の中で、たとえば「油屋」「ゴミの山」「木」「滝」「水」など背景にある事物に学習者の注意を喚起し、その文化的な意味について考えさせる質問をしている。このように学習者の注意を意図的に喚起してやらないと学習者が自力で背景事物から文化的意味を読み取る気づきをすることははないという。

(37) 浜田 (2011) 参照。

この場面についてのモニター学習者の読書記録を見ると、彼らは兵十の喪服と動作、そして、ごんの内言に注目している(【表10】中の下線部)。物語の「囃」に注目しているわけである。彼らが物語の「地」にあたる彼岸花や六地藏のような背景中の事物に注意を払っている痕跡は読書記録には見受けられなかった。しかし、もし彼らに彼岸花や地藏などに込められた象徴的意味についての気づきがあれば物語の解釈に一層の深みが加わったであろうし、既有知識があれば自力でそれに気づくことも可能であったに違いない。それは物語の結末の場面において、「青い火は人の魂」という知識を先に得ていたモニターMが、兵十の銃口から立ち上る青い煙をごんの魂と見ると解釈していたこと⁽³⁸⁾からも推測できる。

ここでさらに日本文学における「地」となるものの要素について考えると、それは物語の背景となる事物等のみならず文章中の表記(漢字・仮名の選択⁽³⁹⁾)および語彙・表現の選択といった言語的要素もコード性を持って地に潜むものに含まれるものと思われる。牧野(2008)にもアニメ作品の中の擬声語、擬態語、人称代名詞、話し言葉に現れるジェンダー、漢字などが日本の文化について考え学ぶための好材料であると述べられている。これらが他言語に翻訳すると失われてしまうものであるが故に、日本語学習者が原語の日本語でアニメ作品に向き合う必要性も生じるわけである。このことはもちろん文学作品でも同様である。翻訳では得られない「地」の部分に潜むものにまで気づくことが日

(38) <http://gongitsune6girls.blogspot.com/p/this-is-japan.html> に投稿されたモニターMのコメント：I recently learned also that the blue light at Gon's death represents tama, or the soul of the dead person. We have this idea of the soul living the body at death, but it is often referred to as a bright light.

(39) 森川(2009)では、吉本ばなな「ムーンライトシャドウ」を使つての授業において、登場人物の名前の表記に学習者の注意を促した例を報告した。名前を命名する際にひらがなにするか漢字にするかなどは日本の文化の中では非常に強い思い入れを持って選択されるところであるが、文化背景の異なる学習者には特に注意の及ばない性質のものであった。翻訳版において表記の区別が消え去り、一律にアルファベット表記となってしまうこともその原因であったかもしれない。

日本文学に向き合う学習者の目指すべきゴールであり、そこまでの過程を経て学習者は真の日本文学の読者となりうるのである。

6. 今後の課題

以上述べてきたとおり、翻訳ではなく日本語で文学作品を読むことには単なる読むことのトレーニング以上の価値、すなわち学習者が文化的な要素にさりげなく彩られた作品世界に向き合って様々なことに対する気づきをし、その人自身の内面に変化(それは感動でもあるだろうし、内面的成長でもあるだろう)が生じうるという価値が認められる。そのプロセスを通して学習者も単なる「学習者」から非母語文学を原語で読む「読者」へと変容する。これは原作者が想定しえなかった種類の「読者」の誕生と言えるかもしれない。

「小品集」サイトはインターネット上でそういった新しい「読者」の誕生へのプロセスを支援することを目指す。教室という枠を越え、学習者の個性と能力と自由を尊重しつつ支援することの最適な形を求めて今後も改良を重ねていきたい。そのための作業として、現在一般のブログサイト⁽⁴⁰⁾にコンテンツを移動しつつ、「読者」に親しみやすいインターフェースと、彼らの「気づき」を促すための工夫を再検討しているところである。

さらに、ユーザー開拓への試みとしてSNS⁽⁴¹⁾を利用して留学生OBを中心とした成人学習者と日本語教育関係者への発信も始め、反響も徐々に得てきている。

今後の課題として、インターネットを通じて日本文学や日本文化の素晴らしさを世界に発信するという役割も担っていきたいと思う。日本語教育には政治や経済などその時の社会情勢に左右される宿命が常に伴う。近年までコンスタ

(40) <http://ttb-bungaku.cocolog-nifty.com/blog/>

(41) facebookページTERAKOYA-tutor.bunko

(URL: <http://www.facebook.com/tutor.bunko>)にて留学生OBを中心とした日本語学習者ファンページを展開している。

またtwitter (@tomaton_mikan) で日本語教育関係者へtutor.bunkoプロジェクトの活動情報などを随時流し、広報活動にあてている。

ントに学習者数が増える一方だった状況が2010年前後から陰りが見え始め、2011年には東日本大震災の影響を受けて国内の日本語教育機関に留学中あるいは留学予定だった学習者の数が一時的に激減するという状況に見舞われた。その後も円高や世界情勢の変化など日本語教育にとっては不利な状況が続いている。しかし、世界にはこれまでに日本語を学んで社会に巣立っていった成人学習者もいれば、日本の文化に価値を見いだしてこれから日本語を学び始める学習者もいる。また、海外に在住する日系人子弟など日本にルーツを持つ子供たちの存在も忘れてはならない。そのような人たちへ向けての生涯教育、継承教育の一端を担える可能性が「小品集サイト」にもあるだろう。日本には社会情勢の波に流されない恒久的な価値を持つ文化がある。そのことを日本文学の作品をインターネットを通じて紹介することで世界に伝えていきたいと思う。

<付記>

本稿の内容は、第10回世界日本語教育研究大会（2011年8月20日21日、於中国・天津外国語大学）における口頭発表の内容に基づいています。発表の席上貴重なご意見やご教示をいただいた先生方に厚くお礼を申し上げます。

<謝辞>

本研究の一部は甲南大学総合研究所および23年度科研費（21320095）の支援を受けて行われました。また、ツールチップ語注表示機能作成システムe-chutaに関する英語・中国語の辞書データを東京国際大学の川村よし子先生よりご提供いただきました。記して感謝致します。

【参考文献】

- カルトン, マルチス・水野雅司 (2011) 「文学作品の読解と情報通信技術」学習院大学外国語教育研究センター紀要『言語・社会・文化』第9号, pp.67-88.
- 栗原由華・中浜優子 (2010) 「ストーリー構築における視点」南雅彦編『言語学と日本語教育VI』pp.141-156. くろしお出版
- 甲田直美 (2009) 『文章を理解するとは－認知の仕組みから読解教育への応用まで－』スリーエーネットワーク

- 柴田節枝（2010）「自己学習力を育てる読解指導の実践：文学教材を使った授業」『2010世界日本語教育研究大会予稿集』1061-5-1061-12
- 瀬尾匡輝（2011）「香港の日本語生涯学習者の動機づけの変化－修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析から探る－」『日本文学』第14号，pp.16-39.
- 高橋和子（2009）「文学と言語教育－英語教育の事例を中心に－」『シリーズ朝倉＜言語の可能性＞10言語と文学』pp.148-169. 朝倉書店
- 田代ひとみ「中上級日本語学習者の文章表現の問題点：不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる」『日本語教育』85，pp.25-37.
- 鶴田清司（2005）『なぜ日本人は「ごんぎつね」に惹かれるのか』明拓出版
- 唐画女（2011）「日本語教育における文学の教え方－文学作品を使った多読授業の実践を中心に－」第10回世界日本語教育研究大会 予稿集Vol. 1『異文化コミュニケーションのための日本語研究』pp.973-974.
- 當作靖彦（2010）「日本語教育と文学の融合－アメリカの大学における3つの試み－」『2010世界日本語教育研究大会予稿集』1061-0-1061-4
- 中井久夫（2010）「われわれはどうして小説を読めるのか」『私の日本語雑記』pp.196-211. 岩波書店
- 西田谷洋（2000）「文学理論入門」<http://www.kokugo.aichi-edu.ac.jp/nishitaya/lec/2000/intro3.htm>
- 浜田秀（2011）「話法論と物語論の交渉」ひつじワークショップ「認知物語論の臨海領域」口頭発表
- ハドソン遠藤陸子（2008）「短編を通して「日本」を教える－5技能融合・5C実践の短編講読講座－」畑佐由紀子編『外国語としての日本語教育 多角的視野に基づく試み』pp.103-118. くろしお出版
- 堀場裕紀江（2001）「L2リーディング研究の課題と可能性」『言語科学研究』第7号，pp.43-63.
- 牧野成一（2009）「文化習得論の構築をめざして」『第二言語としての日本語の習得研究』第12号，pp.5-27.
- 牧野成一（2008）「日本語・日本文化教育とアニメ－『千と千尋の神隠し』の場合－」畑佐由紀子編『外国語としての日本語教育 多角的視野に基づく試み』pp.61-81. くろしお出版
- 森岡明美（2010）「越境文学を日本語3年のクラスで使う試み：文化リテラシー促進のためのクリティカルリーディング」『2010世界日本語教育研究大会予稿集』1061-20-1061-27
- 森川結花（2009）「文学作品をテキストとした上級学習者用読解教材の開発と実践」リーディング・チュウ太ワークショップ&シンポジウム2009発表ppt <http://basilis>.

- konan-u.ac.jp/chuta/morikawa_slide20091003.pdf
- 森川結花・永須実香・春名宣明・北村達也 (2010) 「日本語読解学習支援サイト“tutor. bunko”の構想と開発：総合的な技能養成を目指した方向性とそのコンテンツ」『甲南大学情報教育研究センター紀要』9
- 森川結花・永須実香・浜田崇男・北村達也 (2011) 「ウェブサイトを利用した読解学習支援の実践例」第10回世界日本語教育研究大会 予稿集Vol. 1 『異文化コミュニケーションのための日本語研究』 pp. 979-980.
- 山田純 (1985) 「文における視点」『日本語学』4巻12号, pp. 32-40.
- 横田淑子 (2010) 「日本語学習者のための日本文学：批判的思考能力、文化リテラシーを高めるための活動実践報告」『2010世界日本語教育研究大会予稿集』1061
- 李勇華 (2009) 「中国の国語教育における文学教育の現状」鈴木泰恵・高木信・助川幸逸郎・黒木朋興編『<国語教育>とテキスト論』pp. 259-291. ひつじ書房
- 和田敦彦 (1997) 『読むと言うことーテキストと読書の理論からー』ひつじ書房
- 渡邊亜子 (1996) 『中上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版
- Custodio, B. & Sutton, M. L. (1998) “Literature-Based ESL for Secondary School Students” TESOL Journal Vol. 7, No. 5, pp. 19-23.

【調査した日本語教科書】

- 『テーマ別 上級で学ぶ日本語 改訂版』松田浩志・阿部祐子・亀田美保・桑原直子・田口典子 (1994/2006) 研究社
- 『上級日本語』東京外国語大学留学生日本語教育センター (1998/2010) 凡人社
- 『中級から上級への日本語』鎌田修・根本総子・富山佳子・宮敦敦美・山本真智子 (1998) Japan Times
- 『日本語中級J501-中級から上級へ 英語版-』土岐哲・平高史也・石沢弘子・関正昭 (2001) スリーエーネットワーク
- 『中・上級教科書 日本への招待』東京大学AIKOM日本語プログラム・近藤安月子・丸山千歌 (2001/2008) 東京大学出版会
- 『上級日本語教科書 文化へのまなざし』東京大学AIKOM日本語プログラム・近藤安月子・丸山千歌 (2005) 東京大学出版会
- 『ニューアプローチ中上級日本語 [完成編]』小柳昇 (2002) 語文研究社
- 『日本語 3rdステップ-表現文型で学ぶ中級からの日本語-』石川恵子・山本忠行・日高吉隆 (2008) 白帝社
- 『大学生になるための日本語 (1)』堤良一・長谷川哲子 (2009) ひつじ書房
- 『大学生になるための日本語 (2)』堤良一・長谷川哲子 (2010) ひつじ書房

From Learners to Real Readers of Japanese Literature

—This is what we can do now and we are going to improve
the effectiveness and future possibilities of the site for self-study—

The website “Gems of Japanese Literature” presents literary works for learners of Japanese to improve their reading ability. To make it easier for Japanese learners to read the website's content, the HTML was prepared using a support system of pop-up windows to show the meaning of the words. Furthermore, visitors to the website will also find illustrations and audio files to enhance their experience.

To monitor the effectiveness of the support system on a learner's ability to read and understand on their own, we solicited the cooperation of ten individuals. The results demonstrate that the support system works effectively, and that the learners were able to use their previously learned skills in combination with the support system to enhance their ability to comprehend the texts.

However, they were only able to grasp the gist of the storylines and were unable to read between the lines and recognize the details in the literature. So, to be a real reader of Japanese literature, they must become aware of the background and larger cultural setting hidden in the story.

As a content creator for the website, the next task is to figure out what sort of additions to the support system can be made to help the learners grow to become real readers of Japanese literature.

【Key Words】 Japanese literature, reading materials, online learning support system, learners of Japanese language, readers